

矢守一彦君の死去を悼む

本学会評議員の関西大学文学部教授・大阪大学名誉教授矢守一彦君は、去る8月3日、肺癌のため不帰の客となった。享年64才、学者としては働き盛りの年令で、人文地理学会会長・第15期日本学術会議会員の要職にあった。

矢守君は1927年朝鮮の大邱に生れ、大邱公立中学校から京城帝国大学予科に進んだが、終戦に際して御家族の郷里の彦根市に引き揚げ、金沢の第四高等学校に編入学した。1948年旧制高校卒業後、中学校教諭を2年勤め、1950年旧制最後の学年に京都大学文学部史学科に入り、当初考古学を選んだが、2回生から地理学専攻に転じて私達と一緒にになった。

矢守君は少壮にして大人の風格があり、私は5年の年長でありながら、学問の世界では終始兄事することになった。また、矢守君は高等学校は理科であったが文才があり、引揚げ当時のことを書いた自伝的小説『朝鮮海峡』が新聞の懸賞に入選したこともある。論文においても熟達した文章は、読者を引き込むものがあつた。

卒業論文は「浜縮緬の生成と展開」で、近世都市の研究はここに始まっている。学部卒業後、引き続き大学院研究奨学生として前後期6年の在学中は、主任教授の織田武雄先生の御近所に下宿しており、絶えず先生の御宅に出入りしていたが、1957年に日本で国際地理学会議地域集會が開かれた際、先生の御指導の下に天理で古地図の展観を準備したことなどから、特に古地図への関心が強まったようである。

1958年大学院終了後、名古屋大学文学部助手となり、その間、大学院当時から関係していた『彦根市史』をはじめ多くの地方史誌の執筆に関与して、城下町を中心とする近世都市の研究を深化させた。

1962年大阪大学文学部に移って、1967年には藤岡謙二郎先生と共著の『歴史地理学』を出した。1968年の西ドイツでの存外研究を経て都市と地図史の研究は国際的視野に広まり、やがて1970年に名著『都市プランの研究——変容系列と空間構成——』を生むに至り、1971年同書を主内容とする論題「都市プランの研究」で京都大学から文学博士の学位を受けた。同書とほとんど同時に、既発表論文をまとめた『幕藩社会の地域構造』が出され、1972年には『城



下町研究ノート』『城下町』が出て、城下町研究を志す学生の必読書となった。この頃、室賀信夫先生の御宅にも出入りして古地図研究への傾斜を深め、1974・75年には『都市図の歴史 日本編・世界編』を出して、都市図の研究を一般的にし系統的なものにした。

1990年、定年前に大阪大学を退職して関西大学に移り、織田先生以来地図史研究の一拠点となっている同学での活躍が期待されていたところである。

著書15冊、編著23編、訳書2冊、執筆した地方史誌は8県郡市町におよぶ。最後の著書『古地図への旅』の刊行は本年7月で、まさに死のひと月前のことである。実は、以前は興が乗ればカラオケのマイクを取っていた矢守君の声がかすれてきたことに気付いていたが、昨年秋の人文地理学会に会長である彼が出席できないほどに健康を害していることが気になっていたところ、本書の寄贈を受けていささか安心した矢先の訃報であつた。

告別式の際の織田先生の弔辞は、逆縁となった愛弟子を思う切々たるものがあつた。後で先生は「矢守君は何時も全力疾走していたからな」とおっしゃったが、気楽にやればもっと長生きできたのでは、とのお気持だったのであろう。しかし、君が残した多くの著作は何時までも多くの人の脳裏に刻み付けられていることと思われ、もって冥すべきであらう。

写真は、学生を相手に飲み、かつ語る矢守君の姿で、多紀子夫人によれば「矢守らしくていいでしょう」とのことである。(1992年11月、木下 良)